

朝鮮渡り唐本の研究について

芳村弘道

前言

中國で生まれた漢字は、朝鮮半島や日本に傳播し、東洋の漢字文化圏を築いた。言うまでもなく、その媒介となったのが主として書籍の形態をとった漢字文獻であつた。古代の日本において、朝鮮半島から學者とともに『論語』『千字文』という漢籍がもたらされたという『古事記』『日本書紀』の記事は、そのことを物語る顯著な例である。漢籍による文化交流は、東アジアの傳統文化を理解する上の重要な位置を占めている。本研究は、この重要性に着目し、書物を通しての交流により、古代から近代に至るまで東アジア地域の文化がいかに展開したかを考察し、東洋の漢字文化圏の今日的な意義を改めて認識し、現在の東アジア社會の根柢に流れる漢字文化の不變的價値を明らかにしようとするものである。

一 本研究の意圖

総合的に東アジアの漢籍についての研究を行うには、中國から強い

影響を受け、また日本に大きな影響を及ぼした朝鮮半島の漢籍を考察に加えることが不可欠である。しかしながら、明治初年の楊守敬の『日本訪書志』の先驅的な例に見られるごとく、これまでは主に日本と中國の二國間における事象に焦點を當てる研究が行われ、日中韓の漢籍交流という重要な視點が乏しかった。

漢籍は、中國とその周邊諸國において生み出され、やがて鈔本や刊本のかたちで國內や國外に傳わつた。それらは歴代の學者や讀者によつて多くの研究や鑑賞がなされ、東アジアの重厚な文化を形作っている。こうした漢籍が國境を越えて流通することにより、各周邊國、特に朝鮮半島や日本の文化に大きな影響を與えたことについては、あらためて論ずるまでもないであろう。かつて書物は、主に官人や僧侶、留學生、商人たちによつて將來され、それぞれの國で讀まれるに連れ、装丁を變えたり、識語や藏書印を加えたりして受容され、また抄寫されて複製が作られるなどして廣まっていたのである。

東アジア漢字文化圏は、漢字文獻の流通と受容によつて、重厚な文化を形作ってきた。日本文化の歴史を考える際に、中國や朝鮮半島か

らの影響を全く無視して日本文化を論ずることは不可能であろう。もちろん獨自に發展した文化もあるが、外部からの衝撃無くして、現在のよな日本文化が存在することはありえないであろう。そうした日本への影響について、これまでは中國と日本、朝鮮半島と日本、というように二國間での事象についての研究が行われることが多かった。これらの研究は、當然ながら大きな成果を擧げており、多くの知見を我々にもたらしてくれた。だが、中國の漢籍は、直接中國から將來されたものばかりではなく、朝鮮半島を経由してもたらされたものも少なからず存在している。

論者は、これまで漢籍文獻の研究を行ってきた、日本と中國の二國間での研究だけではどうしても限界があることを痛感している。中國で通行している書物と、日本の通行本（例えば和刻本）とを比較してみると、相當な異同を見ることがある。それには兩者の底本の異なりに起因する場合がある。朝鮮半島に傳來し、その後中國で失われたテキスト系統の本が日本にもたらされ、重刻された那波本『白氏文集』はその一例である。しかし、すべてが那波本のように見なしうるのであろうか。同一書が朝鮮半島でも傳えられた場合、そのテキストの本文を調べる必要がある。書物が中國から朝鮮半島にもたらされ、抄寫や刊行が行われる間に、本文に異同が生じ、それが日本の本に影響した可能性はないだろうか。元は同じ書物であったものが、傳來とともに徐々に内容に變化が生じる、こうした現象を理解するためには、從來のよな二國間での研究ではなく、日中韓三國の流通を視野に入れた研究が必要となってくる。

本研究では、朝鮮半島を経由して日本に傳來した中國刊寫の漢籍（佛典は、さしあたり研究對象から除き、將來の調査研究に委ねる）である「朝鮮渡り唐本」を主な研究對象とする。日本國內にはこの種の唐本が少なからず收藏されているが、從來の漢籍目録では「朝鮮渡り」であることを明記することはほとんどなく、日本國內全體でいいたいどれほどの「朝鮮渡り唐本」が現存しているのか不明である。また「朝鮮渡り唐本」には、かつては日本に存在し、現在は海外の所藏に歸したものもある。日本國內外現存の「朝鮮渡り唐本」が總量でどれくらいあり、またどのような唐本があるのかを明らかにすることが本研究の第一の課題である。またそれぞれの「朝鮮渡り唐本」が、いつ、どこに、どのようにしてもたらされたのか。そもそもそれらは中國のどこで、いつ作られ、いつどのようにして朝鮮に渡り、朝鮮半島で受容されたのか。第一の課題から、こうした課題が派生する。さらにこのような漢籍の傳來の様相を一つ一つ詳細に検討していくことによつて、漢籍の流通が、日中韓三國それぞれの文化や東アジア漢字文化圈全體の文化にどのような影響を與えたのかという大きな課題へとつながっていくのである。こうした課題を可能な限り明らかにしようとするのが、本研究の意圖するところである。

日本傳存の漢籍については、先學によって既に多くの研究が積み重ねられ、大きな成果を擧げている。本研究もそれらの成果の恩恵をうけるところが大きい。ただ從來は、いま日本に傳存している書物そのものに對する研究がほとんどであり、その書物が現在あるところから落ち着くまでの移動の経路や、その移動先それぞれの場所における受

容や加えられた変化などについては、あまり注意されていないかった。本研究は、従来のいわば「静的」な研究に對して、「動的」な観点から研究を行うとするものであり、その意味で強く獨自性を有している。また次項に述べるように、本研究では「朝鮮渡り唐本」の所在調査を行い、解題目録を完成させる予定であり、この解題目録によって多くの新たな事實を明らかにすることができ、さらなる詳細な研究へとつなげることができる。本研究が、また新たな研究課題を生み、さらにまた多くの課題が派生していく。このように、新たなものを生み出す創造性も持っていると考えている。

二 本研究の具體的課題

本研究で明らかにしたい具體的な課題は、下記の六點である。

- ① 「朝鮮渡り唐本」は、日本にどれくらいあるのか（過去に日本に存在し、現在は海外に所藏されるものも含む）。
- ② それらの「朝鮮渡り唐本」は、どのような内容の書物なのか。
- ③ 日本傳存の「朝鮮渡り唐本」は、いつ、どのようにしてもたらされたのか。
- ④ それらは中國のどこで、いつ、どのように作られ、いつどのようにして朝鮮に渡って受容されたのか。
- ⑤ 中國・朝鮮半島・日本において、それらはそれぞれどのような文化的位置にあったのか。
- ⑥ 「朝鮮渡り唐本」は、日本の出版文化や學術にどのような影響を與えたのか。

上記①～④については、國內外の所藏書について徹底した調査を行って、解題稿を作成し、最終的には「日本傳存朝鮮渡り唐本解題集」（假題）として編集したい。なお、これは特定の書物に限っての研究となるかと思われるが、一つの書物が中國・朝鮮半島・日本へと流傳することによって、東アジア漢字文化圏にどのような文化的影響をもたらしたかについても研究を進めたいと考えている。

三 本研究の方法

先述のように、従来の漢籍目録では「朝鮮渡り唐本」も等しく唐本と著録され、「朝鮮渡り」であることが明記されることは稀である。したがって、それが「朝鮮渡り唐本」であるか否かについては、實際に一本一本閲覽して、確認することを要する。そのため、まず國內の各收藏機關に赴いて實地調査を行う。朝鮮風の裝訂や、朝鮮學者の所藏であることを示す印記・識語等に注意しながら慎重に調査を行い、また各收藏機關の書物の受け入れ状況を調べることにより、その書物の來源も確認していく。また韓國、臺灣、中國へ赴いて藏書調査を行ない、「朝鮮渡り唐本」に関わる諸版本や關連資料の調査を行う。本研究は、日中韓三國にまたがって行われる研究であり、中國や韓國の學者の協力が欠かせない。適切な教示を頂くとともに、互いに協力しあつて調査・研究を進めていく。こうした調査を元にして、上記①～④の課題をできるだけ明らかにし、これらの疑問に答える「日本傳存朝鮮渡り唐本解題集」（假題）を完成させるのが、本研究の第一の大きな目的である。

また⑤と⑥については、総合的な研究は将来に期することとし、今回の研究課題では個別の書物について、その各国における文化的な役割や、日本に入って流通することにより、日本の出版文化や學術にどのような影響を與えたのかについて考察を加える。

四 これまでの調査本について

各所蔵機関の漢籍目録やオンライン蔵書目録検索システム OPAC (Online Public Access Catalog) 等を利用して、朝鮮渡り唐本と見做しうる漢籍を抽出したところ、現在のところ以下のような結果が得られた。この調査は京都大學人文科學研究所の梶浦晉氏の御協力によるものである。一言記して感謝申しあげる。

石川武美記念圖書館(舊お茶の水圖書館) 北宋刻本『新雕入篆說文正字』等 115部
 大阪市立大學 明萬曆三十二年刻本『經濟類編』一百卷等 2部
 大谷大學 明萬曆五年刻本『弇州山人四部稿』一百七十四卷 1部
 お茶の水女子大學 明崇禎十四年汲古閣刻本『詩經』八卷等 3部
 學習院大學 明萬曆刻本『弇山堂別集』一百卷 1部
 關西大學圖書館 明嘉靖三十八年序刻本『大學衍義補』一百六十卷 1部
 九州大學附屬圖書館 明刻本『唐詩品彙』九十卷拾遺十卷 1部
 京都大學文學部 明嘉靖二十二年刻本『分類補註李太白詩』二十五卷等 20部
 京都大學經濟學部 明萬曆三十二年刻本『經濟類編』一百卷(缺卷

九十一至九十八) 1部
 京都大學人文科學研究所 明萬曆五年刻本『弇州山人四部稿』一百七十四卷等 11部
 京都大學附屬圖書館 明嘉靖四十五年刻本『遵巖先生文集』四十一卷等 6部
 京都府立京都學・歴史館(舊京都府立總合資料館) 明刻本『唐詩類苑』二百卷等 3部
 宮内廳書陵部 北宋刻本『通典』二百卷首一卷等 3部
 高知大學 明刻本『奎璧四書』全十九卷 1部
 國立國會圖書館 北宋刻本『姓解』三卷等 2部
 中央大學圖書館 明末刻本『大學衍義補』一百六十卷 1部
 筑波大學附屬圖書館 明刻本『百川學海』等 8部
 天理大學附屬圖書館 明經廠本『新編古今事文類聚』等 17部
 東京國立博物館 清乾隆武英殿聚珍本『唐語林』八卷等 5部
 東京大學總合圖書館 明成化刻嘉靖・萬曆遞修本『宋史』四百九十六卷等 13部
 東京大學東洋文化研究所 清嘉慶刻本『述學』內篇三卷外篇・補遺・別錄各一卷等 2部
 東京大學法學部 清乾隆五十八年刻本『太平寰宇記』二百卷(原缺一百十三至一百十九) 1部
 東京大學駒場圖書館 明刻本『正字通』十二集 1部
 東京都立中央圖書館 明正德十二年刻本『全唐詩話』二卷等 14部
 同志社大學 明萬曆二十二年刻清順治・康熙遞修本『宋書』 1部

前田育徳會尊經閣文庫 北宋刻本『重廣會史』一百卷等 2部

早稲田大學圖書館 明末汲古閣刻本『魏書』一百十四卷等 2部

ハーバード大學圖書館 明隆慶刻本『王文成公全書』等 16部

カリフォルニア大學バークレー校東アジア圖書館 明弘治十八年慎獨書齋刻本『大明一統志』等 2部

このほか閲覽調査の機會に知り得たものが下記の通りにある。

陽明文庫 明正徳四年慎獨齋劉弘毅刻本『壁水群英待問會元選要』

八十二卷(缺卷二〇—二二)

明正徳三年至十三年慎獨書齋刻本『羣書考索』前集後集各

六十五卷續集五十六卷別集二十五卷(缺卷二—一八)

韓國學中央研究院藏書閣 明嘉靖刻本『分類補註李太白詩』二十六卷等 2部

慶應義塾大學斯道文庫 明末刻本『元次山文集』等 6部

佐藤道生氏 明崇禎三年刻本『唐文粹』 1部

立命館大學高木文庫 明萬曆九年序刻本『重刊千家註杜詩全集』二十

卷重刊杜工部文集二卷序目一册等 2部

立命館大學圖書館西園寺文庫 明成化八年序刻本『事物紀原集類』 1部

また住吉朋彦氏の調査によれば、下記の諸本がある。

宮内廳書陵部 宋末刻本『附音傍訓庵庵論語句解』二卷

国立公文書館内閣文庫 明初刻本『新編事文類聚翰墨全書』十七集(有缺)

又 明嘉靖三十六年刻本

靜嘉堂文庫 明初刻本(補配元刻本)『新編事文類聚翰墨全書』十七

集 1部

本居宣長記念館 元泰定三年刻本『新編古今事文類聚』六集 1部

イェール大學バイネキ圖書館 弘治元年唐藩翻元張伯顔刻本『文選』

存十四卷(卷26—28・45—53・56・57) 1部

アメリカ合衆國議會圖書館 萬曆十二年序刻本『天目先生集』二十卷
序目・附録各一卷等 2部

国立故宮博物院楊氏觀海堂 元刻本『新編事文類聚翰墨全書』十七集

1部

論者家藏に明末刻本『詩歸』古詩歸十五卷唐詩歸三十六卷がある。

日本國內所藏本の總數は、家藏の一本を加え二六四部になる。そのうち最多の所藏機關は一一五部の石川武美記念圖書館である。海外の所藏本の總數は二四部、最多はハーバード大學圖書館の一六部である。

藤本幸夫先生の『日本現存朝鮮本の研究 集部』の「前言」に、日

本における朝鮮本の存在の「経緯は複雑であるが、時期的に大きく分けて(一)室町末以前の傳來本、(二)豊臣秀吉朝鮮侵略時の傳來本、

(三)江戸時代對馬宗藩を通じての傳來本、(四)明治以降の書肆・學者による購入本、と考へ得るであろう」とある。日本國內の朝鮮渡り

唐本の傳來時期は、おおよそ朝鮮本と等しいと思われるが、第一期の室町末期以前のもは、まだ確認できない。第二期のものでは、宮内廳書陵部の北宋刻本『通典』・石川武美記念圖書館(舊お茶の水圖書館)

の北宋刻本『新雕入篆說文正字』・國立國會圖書館の北宋刻本『姓解』・前田育徳會尊經閣文庫の北宋刻本『重廣會史』が名高いが、筑波大學

附屬圖書館明刻本『百川學海』などにも「養安院藏書」の藏書印を見ることが、この時期に属している。第三期には陽明文庫の明正徳愼獨齋刻本『璧水群英待問會元選要』・明正徳愼獨齋刻本『羣書考索』、東京都立中央圖書館の澁江抽齋、安西雲煙遞藏の『全唐詩話』などがある。第四期が最も多いと思われ、その代表が徳富蘇峰の收藏による石川武美記念圖書館の所藏本である。

海外に轉じた本としては、楊守敬舊藏の國立故宮博物院の元刻本『新編事文類聚翰墨全書』がある。江戸時代の學人の書入れのある明嘉靖版『分類補註李太白詩』は、韓國學中央研究院藏書閣に現藏されているが、かつて李王家の圖書館の所藏本であった。李王家の藏書を充實させるために、日本から戻ったと考えられ、歴史の變遷が書籍の傳來に波及した興味深い事例になる。アメリカの所藏本は、日本の敗戦後に轉じたもので、これにも近代史の流れが反映しているといえよう。

なお家藏の明末刻本『詩歸』古詩歸十五卷唐詩歸三十六卷は、乾隆三十二年（英祖四十三年、一七六七）に燕行使となった李心源が北京で購入したもので、彼の燕行録『丁亥燕槎錄』に記録した一本である。

二〇一九年から「朝鮮渡り唐本」の調査を開始した。以下に、閲覽調査した各機關の所藏本の概要について報告しておきたい。

①京都大學人文科學研究所所藏本

名山藏 一〇九卷 明崇禎十三年序刊本 六四冊

紺色表紙（二七・八×一八・六糎）、琥珀色綴じ糸二重線、四針眼裝。

淺葱色角裂に書根「幾」。白紙襖裝。首冊、白紙護葉二葉（各冊同じ）の後に錢謙益「名山藏序」三葉（半葉八行一八字）。序末に「崇禎十三年庚辰閏正月、舊史常熟錢謙益捧手撰」とあり。朱圈斷句、朱筆批點を加える。首葉に下より「北平來薰／閣陳氏經籍鋪朱文方印、「建功／客韓／所得」朱文方印、「東方文化學院京都研究所」朱文長方印を鈐す。次に王邵の「序」五葉（半葉一〇行二〇字）。次に「較刻名山藏姓氏」二葉（半葉一〇行）。「巡撫福建石僉都御史華亭沈猶龍／（略五名）泉州府知府常熟孫朝讓／同安縣知縣余姚熊汝霖全梓／鄞縣沈延嘉／（略一一名）黃景昉全較／不肖男九雲／（略三名）孫崇仁謹錄」と列記する。次に「名山藏目錄」二葉の後、本文。單邊（二一・二×一三・九糎）、有界一〇行、二〇字。版心、白口、單黑魚尾、上象鼻「名山藏、魚尾下「卷之幾篇目（卷一は「典謨記）」丁付「幾」。首行「名山藏卷之一」、次行低六格「臣何喬恭輯」とあり、下より「伯／豐」

朱文方印、「金氏／基大」白文方印、「清／風」朱文方印を鈐す。金基大（一七三八―？）は、正祖の王妃の孝懿王后の兄に当たり、世子翊衛司の官職を務めたことがある。一七六七年に文科に合格し、『弘齋全書』卷一「春邸錄」に「賀桂坊金基大登科」という題名の詩が載っている。卷四五をもって卷次の記入を終え、以下の巻は毎卷首行書題と版心の巻次を墨丁にする。第二五冊卷四十三の「伯／豐」、「金氏／基大」の二印は、元の印記を截去したのち紙を補って鈐印する。卷四十三に刻工名「郭」「韓」、次冊の卷四十四に「陳」「張」「方」「明」を鈐す。

本版は、「建功／客韓／所得」の印記により、民國期の言語學者の

魏建功が韓國での講學中に購入した朝鮮に傳來していた明末の刊本であった。魏氏から北京の琉璃廠の陳濟川來薰閣に轉じ、來薰閣から收購したものである。紺紙四針眼の唐本に改装したのは、來薰閣のなすところかと思われる。

性理大全會通 七〇卷續四二卷 明鍾人傑編 [明] 刊 四〇冊

淡黄色卍繋ぎ紋空押し表紙(二五・一×一五・八糎)、墨筆打ち付け外題「性理會通 幾」、右上方に目錄外題「目錄」(首冊)、「太極圖」(第二冊)等、右下方墨書「共四十」。紺紙五針眼裝。竹紙刷り。首冊の始めに書扉があり、雙邊「鍾瑞先生補註／性理大全／會通 光裕聚錦(小字雙行) 堂藏板」、上層「李九我先生原本」と記す。次に「成祖文皇帝御製性理序」八葉(半葉五行一〇字)、鍾人傑「性理會通序」四葉、「進書表」四葉、「先儒姓氏」五葉、「纂修姓氏(版心)」二葉、「性理大全會通目錄」二二葉と續く。第二冊から本文、單邊(一八・八×一三・六糎)、有界一〇行二〇字。版心白口、單白魚尾、上象鼻「性理會通」、魚尾下「卷幾 篇目(卷一「太極圖」)(丁付)」。首行「性理大全會通卷一」、第二行低一格「吳郡汪明際點閱」、第三行同「錢塘鍾人傑訂正」。第三四冊から續、版心下方に「續編」とあり。每冊首に「渡邊千春遺愛書」行書朱文橢圓印、表紙裏に「渡邊家文庫」のラベルを貼付。渡邊千春は宮内大臣などを歴任した渡邊千秋伯爵の嗣子。「京都／大學圖／書之印」朱文方大印、「昭和30・8・3」の受け入れゴム印。朝鮮學人の印記を見ない。

容齋[隨]筆 一筆一四筆各一六卷五筆一〇卷 宋洪邁撰 [明嘉靖] 刊 一四冊

灰黄色(白椽色)花鳥紋空押し表紙(二五・八×一六・六糎)、墨書打ち付け外題「容齋隨筆 幾之幾」、右方「二筆」(首冊)、右下「共十四」。赤香色絲(白絲に改める冊もあり)五針眼裝。白棉紙刷り。書根「幾 隨筆」。首冊始めに「容齋一筆五集總序」二葉(半葉九行一八字)、末に「……嘉定壬申仲冬/初吉寶謨閣直學士太中大夫提舉隆興府玉/隆萬壽宮臨川何異謹序」とある。次に「容齋一筆目錄」一一葉(同行格)の後、本文。雙邊(一九・八×一八・〇糎)有界九行一八字、版心白口、單黑魚尾、上象鼻「容齋一筆」、魚尾下「卷之幾(丁付)」。本文首行「容齋一筆卷第一二十九則」。ままた朱筆批點、眉批あり。印記は各冊首に「詹/軒」朱文方印、「李夏/坤印」白文方印、「陶軒/臧書」朱文方印(高田眞治か)のほか、第九冊(三筆卷十二)首葉に別種が多くあり、下より「敬/軒」白文橢圓、「觀文/樓/清事」白文方印、「李夏/坤印」、「佩印/文齋」白文長方印、「淵鑑/齋印」朱文方印、「陶軒/臧書」とあり、表紙裏に墨書「佩文齋」とある。本版は字様と版式からして嘉靖版と推測される。

弁州山人四部稿 一七四卷目錄一二卷 明王世貞撰 明萬曆五年序刊 三一冊

支子色龜甲繋ぎ空押し表紙(二五・一×一七・四糎)。墨筆外題「弁州四部稿 幾之幾(目錄「乾(坤)」、右方に目錄外題。代赭色絲五針眼裝。綴じ糸外右下に墨書「共三十一」。墨筆書根「幾 弁州」

首に「弇州山人四部藁序」凡て七葉（半葉七行、行一一字、一二字不等）、文末に「萬曆五年閏月望日新都汪／道昆序吳門周天球書」「周氏／谷瑕」陰文刻印、末に「唐尹刻」とある。次に「弇州山人四部稿目錄」。第三冊より本文。四周雙邊（二〇・〇×一四・八糎）、有界一〇行、行二〇字。版心白口、單黑魚尾、上象鼻「弇州山人稿」、魚尾下「卷之幾（丁付）世經堂刻」。竹紙刷り、寫刻體。卷二第二葉及び卷三第五・一六葉が補寫、料紙は皮紙。

各冊首葉に「南／龍／翼」朱文方印を鈐す。その他、「汪氏／白王」「司馬／侍中」陽陰文、「東方文化學院京都研究所」朱文長方印あり。南龍翼（一六二八―一六九八）字雲卿、號壺谷は、明曆元年（一六五五）に徳川家綱の四代將軍就任を祝賀する朝鮮通信使の従事官として來日、『扶桑錄』を著す。

弇州山人續稿 二〇七卷目錄一〇卷 明王世貞撰 「明萬曆」刊五〇冊。

白茶色梅花丸紋散らし空押し表紙（二六・五×一七・〇糎）。墨筆外題「弇州續集 幾之幾（目錄「上（下）七」、右方目錄外題。白茶色絲五針眼裝。右下「共五十」。墨筆書根「幾 弇續 詩（などの分類名）。雙邊（一九・七×一二・八糎）、有界一〇行、行二〇字。版心白口、單黑魚尾、上象鼻「弇州山人續稿」、魚尾下「卷之幾（丁付）。方體字。卷四から卷六は補寫。

各冊に「李坤／信卿／之印」朱文方印、「操／陰」白文方印、「東方文化學院京都研究所」朱文長方印あり。

東坡集選 五〇卷 明王世貞編 「明萬曆・崇禎」刊 八冊

楮染色空押し紋表紙（二一・七×一六・〇糎）。墨筆外題「東坡集選 金（八音）。右方に類目を墨書、右下に冊次「幾」、墨筆書根「坡選」。

首に白紙（朝鮮紙）一葉を護葉とし、次に「蘇文忠公外紀上」二卷、凡て四二葉、首行「蘇文忠公外紀上」、次行低一格「瑯琊王世貞編」。單邊（二一・一×一三・三糎）、有界九行、行一九字。版心白口、單白魚尾、上象鼻「外紀上」、下方に丁付「幾」。「外紀下」は凡て四二葉、首行「外紀下」とのみ記す。次に「外紀逸編」凡て七葉、首行「外紀逸編」、次行低一格「豫章璩之璞補」。次に本文、行格は「外紀」と同じ、單邊（二一・四×一三・三糎）、版心、上象鼻「東坡集選」、魚尾下「卷幾」。首行「東坡集選卷一」、次行低一格「小文類」、第三行低一格「志林」、第四行低二格「記游」。竹紙刷り。字様は明末の細瘦の風、萬曆末、崇禎の刊刻であろう。各冊首葉に「京都／大學圖／書之印」朱文方印の他に藏書印を見ず。受け入れスタンプ印に「昭和34・10・9」とあり。

卷一から卷五まで「小文類／志林」（卷三から金冊）、卷六・七「小文類／雜記」、卷八「小文類／雜文」（以上石冊）、卷九「小文類／書後」、卷十「小文類／書事」、卷十一・十二「小文類／尺牘」、卷十二「小文類／贊」（以上絲冊）、卷十四冊「贊」、卷十五・十六冊「小文類／銘」、卷十七「小文類／頌」、卷十八「小文類／偈」、卷十九「小文類／箴」、卷二十「文類／敍」、卷二十一「文類／記」（以上竹冊）、卷二十二・二十三「文類／記」、卷二十四「文類／傳」、卷二十五「文

類／書、卷二十六「文類／啓」、卷二十七「文類／祝文」、卷二十八「文類／祭文」、卷二十九「文類／墓誌」、卷三十「文類／碑文」（以上鞆冊）、卷三十一「文類／擬作」、卷三十二「大文類／策問」、卷三十三「大文類／制策」、卷三十四「大文類／策略」、卷三十五「大文類／策別」、卷三十六「大文類／論」（以上土冊）、卷三十七「大文類／表狀」、卷三十八「大文類／外制制勅」、卷三十九・四十「大文類／奏議」、卷四十一「賦類」（以上革冊）、卷四十二「辭類」、卷四十三「詩類／四言古」、卷四十四「詩類／五言古」、卷四十五「詩類／七言古」、卷四十六・四十七「詩類／五言律」（朱筆斷句圈點、旁批圈點、藍筆批點あり）、卷四十八「詩類／五言絶句」、卷四十九「詩類／七言絶句」、卷五十「詩餘／小令長調二十闕」、續いて「東坡集餘」（首題）を附し、次行低十格「豊干潘允宜校」とあり、第三行低一格「雜説」、版心上象鼻「雜説」（以上木冊）。

（新刻）張太岳先生詩文集 詩集六卷文集四一卷合四七卷序目一册
明張居正撰 萬曆四十年序刊 一六册

淺黄色卍繋ぎ花紋圍み表紙（二五・一×一五・八糎）。墨筆外題「太嶽集 幾（目錄冊「目錄」、右下「共十六」。五針眼裝、紺色絲綴じの朝鮮改裝本。墨筆書根「幾 張 五古（など類目）」。

首冊は序目。首に書扉、雙邊「江陵張太岳／文林唐氏家藏／先生全集」とあり。次に低二格「張太岳集序」凡て八葉、五行一三字、末に「萬曆壬子歲重九日……門生沈鯉頓首拜撰」の序あり。次に「書太學張先生文集後」、末に「萬曆壬子中秋……呂坤頓首拜言」とあり。そ

の後に馬啓圖の「張文忠公詩跋」、高似儉「太師張文忠公集跋」、劉芳節「編次先公文集凡例敬題」を列し、「新刻張太岳先生文集目錄」凡て七四葉が續く（目錄の題名の「新刻」は補刻）。第二冊から本文、單邊（二一・六×一三・八糎）、有界一〇行、二〇字。版心白口、單黑魚尾、魚尾下「卷之幾 幾（丁付）」。首行「新刻張太岳先生詩集卷之一」、これも「新刻」の二字は補刻であろう。第二行低八格「江陵叔大張居正 著」、第三行以下「後學雷思霈／馬啓圖（跨行）校」「繡谷唐國達 梓」。第三冊、首行「新刻張太岳先生文集卷之七」、次行低八格「江陵 叔大張居正 著」、第三行「後學曾可前／高似儉（跨行）校」。首題の「新刻」の二字、卷二四・二五は「新刊」とし、尾題にはこの二字なし。末卷は「太師張文忠公行實」となっている（尾題「太師」の二字を闕く）。

孤樹衷談 一〇卷 「明」刊 一〇册

支子色雷紋繋ぎ菱花紋空押し表紙（二六・二×一六・六糎）。墨筆外題「孤樹衷談 卷幾」、右上「太祖」（卷一）より「武宗」（卷十）の皇帝名を記す。右下「共十」、綴絲外に册次「幾」の墨書。五針眼の朝鮮改裝本。新補代赭色雙線綴じ。墨筆書根「孤樹衷談 幾」。

首に朝鮮皮紙の護葉一葉。次に「孤樹衷談引用書目」二葉。次に本文、有界一三行、二四字。版心白口、雙内向黑魚尾、上魚尾下「幾卷（丁付）」。首行「孤樹衷談卷之一 甲集」、空二行「太祖上之上洪武紀元」。朱墨筆による圈點、人名・地名の右旁に豎線。印記「寺／澤」朱文圓印。

白氏長慶集 七一巻 唐白居易撰 明馬元調校 明萬曆三十四年序刊
一八冊 集II-2-320

淡黄色諸種紋様空押し表紙(二四・六×一六・〇糎)。墨筆外題「白氏長慶集 幾」、右上方に分類(分體)名、綴じ絲右下「共十八」の墨書。五針眼装、淡藍色絲綴じの朝鮮改装本。墨筆書根「幾 白集 分類(文體)名」、分類(分體)名は濃墨別筆による補筆。

首冊表紙裏に次のごとき墨識あり。

平岡老博士 惠存

續修庫書提要印行記念

昭和四十七年夏五月橋川時雄敬贈

「橋」朱文方印

橋川時雄氏は、戦前に北京人文科學研究所において『續修四庫全書提要』の編纂を推進した。その一部分が京都大學人文科學研究所に保管されていた。同研究所教授の平岡武夫氏の斡旋により臺灣商務印書館がこれをもとにして一九七一年に出版を始め、翌年に刊行を終えた。その記念に橋川氏が本版を平岡氏に贈呈したことが右の識語によって分かる。

首冊は首に吳郡婁堅の「重刻白氏長慶集序」三葉(半葉七行、一四字)があり、末尾に「萬曆丙午(三十四年)孟秋序」とある。次に白居易「白氏長慶集後序」一葉(一〇行二一字)、續いて「白氏長慶集附錄」一一葉(二〇行二一字)があり「新唐書本傳」、李商隱「白公墓碑銘并序」、陶穀「龍門重修白樂天影堂記」を収録する。次に「白氏長慶集目錄上」七〇葉を載せ、毎行冒頭に所收冊次を墨筆記入する。

第二冊は「白氏長慶集目錄下」と本文卷一。「目錄」の末葉に「魚樂軒(缺損あり)」とある。有界一〇行、二一字、注小字雙行。雙邊(二〇・三×一三・六糎)。版心白口、單黑魚尾、上象鼻「白集」、魚尾下「卷幾(丁付)」。竹紙印本。

本文首葉、次の通り。

白氏長慶集卷第一

唐太子少傅刑部尚書致仕贈尚書右僕射太原

白居易樂天著

明後學松江馬元調巽甫校

以下、本文。

第四行に示されるごとく本版は明の馬元調の校刻本であり、馬元調が『元氏長慶集』と合刻した『白氏長慶集』である。まれに朱筆批點、朱線を加える。欄上に朱筆の批注。表葉版心上欄に「諷」「問」「感」などと分類名を墨筆で略記する。缺損部分を墨筆で補寫。

各冊の首葉に「西(?) 琴/書屋」朱文方印、「龍仁/李奎/東聚/五印」白文方印があり、婁堅序の首行と第一〇冊首に「橋川/時雄」朱文方印がある。「西(?) 琴/書屋」と「龍仁/李奎/東聚/五印」の二印は、東京國立博物館所藏の萬曆三十四年序刊、清の金閨寶翰樓の後印本の『東坡先生全集』にも鈐せられている。李奎東は、趙鼎和『默齋記思』(道光戊申(二十八年、一八四八)自序)の跋文を撰した學者である。

②東京大學總合圖書館所藏本

四書全解 二〇卷（存孟子卷一・六下） 清鄧丙編 邢淳校 〔清〕刊
二冊 B60-2564

香色表紙（二五・〇×一五・九糎）。墨書外題、第一冊右上「孟子一」、第二冊左上「四書全解」、右上「孟子六下」。單邊題簽の痕跡がある。

雙邊（二〇・三×一二・七糎）、無界一二行、三〇字、注小字單行三〇字。版心白口、單黑魚尾、上象鼻「四書全解」、魚尾下「孟子梁惠 卷一（丁付）」、下方「映旭齋」。墨筆書根、第一冊「乙」、第二冊「八」。竹紙印本。

第一冊首に「孟子序說」五葉がある。本文首葉、首行「四書全解卷一」、第二行低一七格「上元鄧丙葦夫參訂」、第三行同「高淳邢 淳鎮英全訂」。次いで孟子の正文を平擡で記し、朱注を低一格で加え、次に低一格で墨圍をもって「合參」「疏解」と示し疏文を配する。第二冊は卷六（告子）の第四九葉以下を存す（末葉は第九七葉）。『北京大學圖書館古籍善本書目』（北京大學出版社、一九九九年六月、頁三五）に本書の「清康熙四十三年（1704）映旭齋刻本」を著録し「二十卷」とする。

各冊の首葉に「子／章」朱文方印、「趙印／尙綱」白文方印、「豐壤／後人」朱文方印。各冊末葉に「五世／銓部／武朝／經筵」朱文大方印、「鶴／塘」朱文方印。また各冊表紙裏に「東京帝／國大學／圖書印」朱文大方印（以下、この印記は記載を省略）。

舊藏者の趙尙綱（一六八一—一七四六）は、字子章、號鶴塘、諡景獻、豐壤の人。以下、『八編類纂』に至る諸本も趙尙綱舊藏本である。

東大には趙氏舊藏本が多く、朝鮮活字本（戊申字印本）『春秋集傳大全』

には「乾隆三年五月初五日／内賜行議政府左參贊趙尙綱春秋集傳一件／命除謝／恩／右承旨臣李（花押）」という内賜記があり、乾隆三年（英祖十四年、一七三八）五月五日に趙尙綱が下賜を受け、當時、行議政府左參贊であったことが分かる。これより先、彼は雍正九年（辛亥、英祖七年一七三一）十一月に「冬至兼謝恩副使」として燕京に赴き、翌年五月に復命した。この燕行を詩に詠じた『燕槎錄』を著した『鶴塘遺稿』冊二・『燕行錄全集』卷三十七所収。その一首に「買書『燕行錄全集』卷三十七、二〇六頁）があつて、「經籍猶餘秦火烟、購來市肆太多緣」と詠い起す。ただし、いかなる書を購入したかは言及しないが、本書『四書全解』がこの燕行の購書の一つであつたという想像も可能に思われる。

孟子 七卷 宋朱熹注 〔清〕刊 二冊 B60-2567
淡灰赤色表紙（二三・四×一四・七糎）。白紙雙邊の題簽の残存あり。四針眼裝（清代の裝訂）。

首に「孟子序說」五葉、その末葉裏葉に「莆陽鄭氏再訂／金陵奎壁齋梓」の木記。次いで本文、首行「孟子卷之一（空四格）朱熹集註」、次行「（低三格）梁惠王章句上凡七／章」。雙邊（一八・一×一二・一糎）、有界九行、一七字、注小字雙行。版心白口、無魚尾。上方に「孟子梁惠王（丁付）」、下方に「卷幾」。上欄音注。圈點斷句。竹紙印本。各冊首葉に「趙尙／綱印」朱文方印。

増訂龍門四書圖像人物備考（鼈頭本）十二卷（存大學一卷・中庸二卷・論語卷一）明薛應旂撰 陳仁錫補 清康熙五十六年刊（古吳三樂齋）似冊 B60-2563

淡灰赤色表紙（二三・八×一四・四糎）。題簽剝落の痕跡あり。第二冊は新補香色表紙を加える。四針眼裝訂（康熙綴じの針眼を存する）。白紙上下雙邊書扉、上欄「孫子朱先生詳訂」、右欄「薛方山先生原本／陳明卿先生增定丁酉新鐫（紅色套印）」、中央大字「龍門四書人物備考」、左欄「羣圖畢輯／註釋無遺（紅色套印）」古吳三樂齋梓行、上方に朱文魁星印、左下に「式樂／齋／臧板」白文大方印。竹紙印本。首に陳仁錫序（缺首葉）五行一字、版心上方に「陳序 幾」、下方「三樂齋」、末尾に「（低一格）史官陳仁錫題／（平擡）康熙歲次丁酉春月新鐫」とある。次に「増訂龍門四書圖像人物備考目錄」一〇葉、圖二二葉の後に本文。單邊（二〇・四×一二・六糎）、無界一二行、二七字、注小字雙行。版心白口、單黑魚尾、上象鼻「四書人物考」、魚尾下「卷一大學 曾子（丁付）」、下方「三樂齋」。第一冊裏表紙を缺く。第二冊末葉に「五世／銓部／式朝／經筵」朱文大方印、「鶴／塘」朱文方印。

史記 一三〇卷（存卷二三・三〇・六一―七六）漢司馬遷撰 宋裴駟集解〔明〕刊（汲古閣）二冊 G30-743
白色表紙（二五・九×一七・四糎）。第三冊に墨筆外題「列傳」。墨筆書根「四（八）史」。素絲二重線、四針眼、唐本裝。竹紙印本。
雙邊（二一・三×一四・六糎）、有界一二行、二五字、注小字雙行

三七字。版心白口、單黑魚尾、魚尾下「汲古閣 毛氏／正本（墨圍小字雙行）（丁付）」。各卷卷首尾題下に「琴川鳳苞／氏審訂宋本」の木記あり。各冊首葉に「子／章」朱文方印、「趙印／尚綱」白文方印、「豐壤／後人」朱文方印、末葉に「五世／銓部／式朝／經筵」朱文大方印、「鶴／塘」朱文方印あり。第一冊上層に墨筆小字の音義注の書き入れ、また裏表紙の護葉に「漢羣臣□□（破損）韓信／補文學才藝掌故」の墨書あり。

隋書 八五卷（存卷五五―六七）唐魏徵等奉敕撰〔明〕刊（汲古閣）二冊 G30-742
白色表紙（二六・二×一七・五糎）、黄橡皮雙邊題簽墨筆「隋書 幾」、右方「列傳」、次行以下に所収の人名を列記する。墨筆書根「幾（十二／十三）隋」。素絲四針眼、唐本裝。第一冊は卷五五から六二、第二冊は卷六三から六七を存する。竹紙印本。
雙邊（一四・六×二一・五糎）、有界一二行、二五字。版心白口、單黑魚尾、魚尾下「汲古閣 毛氏／正本（墨圍小字雙行）（丁付）」。
各卷卷首尾題下に「琴川鳳苞／氏審訂宋本」の木記。印記は前掲の『史記』に同じ。

藏書 六八卷（存三一―八・五二―五四）續藏書二七卷（存卷二四―二七）明李贄〔明萬曆〕刊 四冊 G30-741
香色表紙（二七・三×一七・一糎）。墨書打ち付け外題「藏書 幾」。第一・二冊には目錄外題がある。四針眼、唐本裝。綴じ糸新補。第一

冊『藏書』卷三から五、第二冊巻六から八、第三冊巻五二から五四、第四冊『續藏書』巻二四から二七を存す。竹紙印本。

單邊（二一・七×一三・八糎）、無界一〇行、二四字。版心白口、單黑魚尾、上方に「藏書 漢孝宣世紀」（第一冊）、魚尾下「卷幾（丁付9）。上層に批注を刻す。各冊首葉に各冊首葉に「子・章」朱文方印、「趙印／尚綱」白文方印、「豐壤／後人」朱文方印、末葉に「五世／銓部／武朝／經筵」朱文大方印。印色は如上の諸印と同じ。本文に批點、人名右旁に線を刻す。

宋史 四九六卷目錄三卷 元脫脫等奉敕編 明成化十六年序刊（嘉靖三十五—萬曆二十八年遞修。有補鈔） 一〇〇冊 G30.1077

淺黃色龜甲繫文空押表紙（二七・四×一七・四糎）。墨書打ち付け外題「宋史 幾」、上方に目錄外題「本紀／太祖／太宗」（第二冊）。紺色絲單線五針眼、朝鮮改装本。第二冊（この冊より本文）以降、右下に「共百」。書根「幾 宋史本紀（志、表、列傳）」。竹紙印本。

首冊序目。首に「進宋史表」、次に「宋史目錄」上・中・下巻。第二冊から本文。首葉、四周雙邊（二〇・七×一三・九糎）、有界一〇行、二十字、注小字雙行、版心線黒口、雙内向黒魚尾、上象鼻「萬曆二十八年刊」、上魚尾下方「宋史本紀卷一」、下魚尾下方「一（丁付）博士陳校」とあり。この首葉は補刻葉である。第二葉は原刻葉で、四周雙邊（二一・二×一四・三糎）、版心大黒口、雙内向黒魚尾、上魚尾下方「宋史本紀卷一」、下魚尾下方「二（丁付）四百八字个（字數陰刻）」。巻四九六末尾に成化十六年三月吉旦袁禎の「宋史後序」があ

る。

原刻の字様は寫刻體。補刻は方體が多いが、寫刻體もある（萬曆十五年補刻の巻九六第一〇・一一葉、卷一二二第一三葉、卷一三九第一四葉）。補刻葉の版心下方に校刊者名を刻することがある（卷一第一九葉嘉靖丙辰年補刻「監生劉夢雷刊」、卷九十六第一〇・一一葉萬曆十五年補刻「裴龍」、卷一三九第一四葉萬曆十五年補刻「裴魁」。補鈔（竹紙、四周雙邊、墨界一〇行二〇字）は、卷六第八葉、卷二第二一三葉、卷二二第七葉、卷四一第一五・一六葉、卷一〇九第一四葉、卷一六二第八葉（六・七葉の一部）、卷一六七第三二葉、卷一七二第一八葉、卷一九二第八・二五葉、卷二〇三第二七葉、卷二二七第五六葉、卷二三一第一五葉、卷二三八第二四葉（以上同筆）。卷二八二第二葉と卷二八六第一一・一二葉、卷三一三第六葉は別筆。卷三五五第七葉、卷四一〇第一六葉は前の筆者に戻る。補刻は萬曆二十八年に下る葉は確認できなかった。

第六〇冊の表紙裏から裏表紙裏に所収「皇妃」「宗室」各傳の人名を四段に墨筆列記する。また第一二冊表紙裏に「宋史十二／志／天文」と墨書した朝鮮の紙片を見る。同様の紙片は第一三・一七・一八冊にもある。毎冊首葉に「金氏／臧書」白文大方印。表紙裏に「東京／大學／圖書」朱文大方印。

③東京都立中央圖書館（市村文庫）

全唐詩話 二卷 舊題宋尤袤 明正徳二年刊（東魯鮑繼文） 二冊 9211W197-1

支子色雷文繫地花紋散空押表紙(二五・七×一五・六糎)。墨筆打ち付け外題「全唐詩話上(下)統二冊」。五針眼の朝鮮改装本、新補櫻色單線綴。墨筆書根「全唐詩話」。白棉紙印本。

首に「全唐詩話序」(凡て三葉、有界七行一三字)、末に「(低一格)正徳二年丁卯季冬之望/賜進士亞中大夫陝西布政司奉/勅督理糧儲右參政臨汾安惟學序(三刻印「藏庵」陰刻・「行/之」陽刻・「甲辰/進士」陽刻)とある。次に「全唐詩話目錄」二葉(一〇行)、尾題「全唐詩話目錄畢」。所收詩人は太宗から白居易に至る。次に本文、首行「全唐詩話卷之上」、次行低三格「太宗」。四周雙邊(一九・一×一二・〇糎)、有界一〇行一八字、注小字雙行。版心黒口、三黒魚尾(二下向・一内向)、上魚尾下に卷次「卷上(下)」、中魚尾下に丁付け「幾」。目錄から通し丁。第二冊は卷下、首に「全唐詩話目錄」二葉(尾題「全唐詩話目錄終」)。牛僧孺から權龍褒までを收載。本文の後に原跋一葉(本文と同行格、裏葉一行まで)を附し、末尾に「咸淳辛未重陽日遂初堂書」とある。次いで「全唐詩話後序」二葉(第二葉表葉六行まで)、末尾に「正徳丁卯(二年、一五〇七)吉汝南強晟識」とあり、その第二葉裏葉に雙邊木記「正徳丁丑(十二年、一五一七)正月穀/旦東魯鮑繼文伯正/重刊於雲中教養堂」とある。すなわち本版は、正徳二年本の重刻本である。「後序」によれば、正徳二年本は秦民望が按陝の暇に偶然得た鈔本によって上梓したものである。また「後序」は本書の撰者を南宋の尤袤とみなすが、偽託である(『四庫全書總目』卷一九七は賈似道が廖瑩中に編せしめたと考證する)。

朱筆・藍筆で斷句點を少しく加え、王維條に評點を見る。張元一條

の上層に朱筆批注「夾豕蓋謂遯字也」がある。印記は表紙裏に「子孫永保一雲煙家/藏書記」單邊長方藍印(安西雲煙)、朱文長方下に重なつて鈐せられているが印文未詳。各冊首葉に「納月/堂藏」朱文方印、「從虎/李義」朱文方印、「河西/金氏」朱文方印(印色ともに同じ。末葉にもあり)、「正建/珍藏」朱文方印、「弘前醫官澁/江氏藏書記」(澁江抽齋)朱文長方印。本文首葉に「□/安」朱文爐式印、「市村文庫」(市村瓊次郎舊藏)墨印、「東京都/立圖書/館藏書」朱文大方印(以下、市村文庫印・東京都立中央圖書館印は記載を省略)。裏表紙に墨筆「主徹 花押」、朱筆「主徹」とあるが墨筆で抹消、墨筆「徹 花押」を留める。下冊末にも墨筆「主徹 花押」あり。澁江抽齋、安西雲煙、市村瓊次郎遞藏。江戸時代以前に將來された一本と思われる。安西雲煙の藏印を有する朝鮮渡り唐本に、韓國學中央研究院藏書閣所藏の明萬曆十五年序刊本『楚辭句解評林』がある。

唐詩品彙 九〇卷拾遺一〇卷 明高棟編 張恂校 [「明末」刊(後修)二四冊 9211W225
淺黄色卍繫散空押表紙(二五・二×一五・九糎)。墨筆打ち付け外題「唐詩品彙 幾」、右上に目錄外題「五言古詩/正始/正宗」等、右隅「二十四」。墨筆書根「幾 詩體名(五古等)」。朝鮮改装本。新補濃褐色絲單線五針眼裝。竹紙印本。

首冊は表紙の裏に朝鮮皮紙の護葉一葉を附し(裏表紙も同じ)、次いで内封面があり、雙邊「龍門高廷禮論定/唐詩品彙(大字)/京都文錦堂藏板」と記す。以下、張恂「重訂唐詩品彙序」、洪武甲戌(二十七

年、一三九四) 王儻「敍」、「歴代名公敍論」、洪武癸酉(二十六年、一三九三)の高棟「唐詩品彙總敍」、「凡例」、「詩人爵里詳節」を収載。第二冊は「引用諸書」、「唐詩品彙總目」、次に各體の敍目から成る。第三冊から本文。雙邊(一九・八×二二・八糎)、有界一〇行、二〇字、注小字雙行。版心白口、單黑魚尾、上象鼻「唐詩品彙」、魚尾下「卷之幾 幾(丁付)」。本文首行「五言古詩卷之一(空三格)唐詩品彙一」、次行「(低一格)新寧高 棟編輯」、第三行「(低一格)關中張恂重訂」。第二冊以後が「唐詩拾遺」一〇卷。首に洪武戊寅(三十一年、一三九八)の高棟の序、次いで目錄を配す。卷八〇・八七の首二葉は前後と字様を異にしており補刻と見なせる。「拾遺」卷八から卷一〇に朱筆斷句點、卷一〇に韻目の書き入れがある。

朱文方印の舊藏印三鏤が重ね押しされて印文の判讀が困難である。

梅崖居士文集(目首による) 三八卷外集二卷 清朱仕琇 清乾隆二十四年序刊 六冊 924W10

香色表紙(二五・四×一六・六糎)。右上に墨筆で文體名「頌賦哀辭……」等、右隅に冊次「幾」。素絲雙線四針眼裝。淺葱色角裂。裝訂は唐本のまま。墨筆書根「幾 梅崖集」。本文料紙は稍厚手の竹紙。

首に書扉、單邊「梅崖居士文集(大字) / 松谷藏板」。次に乾隆戊寅(二十三年、一七五八)の雷鏐の「題」、以下、乾隆己卯(二十四年、一七五九)の宗人の離の書(版心「鼎序」)、同年の朱仕琇筠園の「序」(版心「筠序」)、「梅崖居士文集目錄」(每卷首に目錄あり)。次いで本文。雙邊(一九・五×一三・一糎)、有界九行、二五字。版心

黒口、雙内向黒魚尾、上魚尾下「梅崖居士文集卷之幾 幾(丁付)」。本文首行に書題がなく、篇題をもって始まる。批點および諸家の評語が上層と行間に刻入される。

印記、序首に「金正喜氏 / 考定之印」朱文長方印、本文首に「秋史 / 珍藏」朱文方印、「金印 / 正喜」朱文方印があり、金正喜(一七八六―一八五六)の舊藏本と知る。金正喜は『阮堂全集』卷五「代權彝齋與汪孟慈書」に「至唐宋八家之法、作者甚鮮。方望溪・姚惜抱・朱梅崖・張皐文・惲子居若干人外、併非正脈」といい、朱仕琇を古文の正統に屬する一人として評價している(『阮堂全集』のこの文は高麗大學校研究教授の魯耀翰氏の教示による)。本版は清代古文に關する金正喜の研鑽を窺わせる資料といえる。明治以降の將來本と推測される。

④公益財團法人 陽明文庫

群書考索 前集六卷後集六五卷續集五六卷別集二五卷(缺卷一一―一八) 宋章如愚編 明管韶等校 明正德三―十三年刊(慎獨書齋劉洪、正德十六年修) 二九冊 〃・57

灰白色雲母引艶出(紋様不明)表紙(二三・五×一四・二糎)。茶褐色絲單線五針眼裝。墨筆外題「羣書考索 幾之幾 / 前(後、續、別)」、右傍に門目・類目を記し、右隅「共三十」。書根墨筆「幾 羣書考索前(後、續、別)」。書背に墨筆「羣書考索前(後、續、別) 근서고긔 卷(辛、今、兪)」。表紙裏に類目などの項目を墨書。竹紙印本。

首冊は初めに正徳戊辰(三年、一五〇八)莆田守鄭京の「山堂先生群書考索序」、次に「山堂先生眞像」、裏葉に小傳、ついで「群書考索

綱目」、「群書考索目錄」を附す。

本文首葉、四周雙邊（一九・五×一二・六糎）、有界一四行、二八字。注小字雙行。版心大黒口、雙下向黒魚尾、上象鼻「考索前集卷之二」、上魚尾下「六經門」、下魚尾下に丁付け。第一行「群書考索卷之二」（跨行）、第二行以下「（低二格）山堂先生章俊卿編輯」（低二格）建陽知縣區玉刊行（低二格）○六經門（空一格）縣丞管韶校正（空四格）易類（低七格）羅源知縣徐珪校正。

木記が各集目錄の末葉にあり、前集「皇明正徳戊寅（十三年）／慎獨書叢刊行」、後集「皇明正徳戊辰（三年）／慎獨書叢刊行」、續集「皇明正徳戊辰／慎獨書齋刊行」（以上ともに雙邊雙行）、別集は單邊單行「正徳三年慎獨益鼎新刊行」。また別集の大尾に雙邊木記「正徳十六年十一月内蒙／建寧府知府同知鄒同校正過山堂考索（空二格）計改差訛三千二十七字（低七格）書戶劉洪改刊」がある。

第二九冊に當る別集の卷二から一八が缺佚。また缺葉が前集卷八末・卷六〇首（白紙補入）、後集目錄第五―八葉・卷二六第三葉以下（墨界無文料紙補入）卷二七首五葉（墨界無文料紙補入、首葉四行のみ補寫）・卷五二末・卷五九首四葉、續集卷五〇第六葉（墨界無文料紙補入）、別集目錄首葉（後集の目錄第二葉を錯綴。なお後集目錄第一葉は卷五九の首に錯綴）・第三・四・六―九葉にある。補寫葉もある。第一五冊（後集卷三七―四三）・第一七冊（同卷五一―五八）に朝鮮の白紙原表紙が残存する。後集目錄首三葉が補寫。

末冊裏表紙に墨筆で人名が以下のように列記される。

月城李鳳男瑞仲 慕庵靜夫

李元男仲仁 柳□處士

西原慶 諧子和 初軒居士

豐城趙大得士行 月□嘯翁（右旁「竿」）

□□別試同□録（□は判讀困難字）

印記は「趙大得／士守」朱文方印、「希古」木葉形白文のほか、近衛家第二十一代當主の家熙（一六六七―一七三六）自刀による「唾拈書／勿侵紙／勿以／指夾葉／葉折角」朱文大方印と「陽／明／藏」白文横長（ともに家熙印）、「陽／明／藏」朱文横長大印。家熙所藏以前の舊藏印の「土藏」墨圓圍方印。江戸前期以前の朝鮮渡り唐本。

壁水群英待問會元選要八二卷（缺卷二〇―二二） 宋劉達可編 明沈子淮重編 王子謙等校 查仲儒等評 明正徳四年刊（建陽、慎獨齋劉弘毅） 二七冊 へ・6

淺葱色表紙（二二・八×一五・一糎）。淡紅色絹絲雙線四針眼裝。前後二次の裏打ち補修がなされ、第二次に唐紙を裏打ち紙に用いる。墨筆打付外題「壁水羣英 幾之幾」（近衛家瀝筆）。竹紙印本。

首に正徳四年（一五〇九）王敕の「壁水群英待問會元選要序」、次に淳祐乙巳（五年、一二四五）陳子和の原序、「壁水群英待問會元選要各類總目」、「壁水群英待問會元選要類目」を附す。

四周雙邊（一九・〇×一二・二糎）、有界一三行、二六字。版心黒口。雙下向黒魚尾、上象鼻「壁水群英卷之幾」上魚尾下に類目「時政急務」（卷二）、下象鼻下に丁付け「幾」。本文首行「壁水群英待問會元選要

卷之一」、第二行以下「(低一二格) 大宋(橢圓墨圍) 建安 劉 達可
編集／(低一二格) 皇明(橢圓墨圍) 華亭 沈子淮 精選／(以下、
低一四格) 濟南 王子謙 校正／寧州 查仲儒 批點／吳江 徐 珩
批點／建陽 劉 弘毅 刊行」。

朝鮮の學人による朱筆・藍筆の批點を見る。江戸時代初期以前と思
われる墨筆の訓點が施される。「密陽朴／尙賢希／聖之章」朱文方印
および「元湛(?)／太□」朱文方印がある。「陽／明／藏」白文横
長(家熙印)、「陽／明／藏」朱文横長大印。

⑤慶應大學附屬研究所 斯道文庫

唐元次山文集 一二卷 唐元結撰 明陳繼儒鑒定 吳震元・王時敏校
〔明末〕刊 四册 ホ921-41

後補香色唐紙表紙(二四・二×一六・〇糎)。この香色唐紙表紙は、
以下の坦堂文庫本に共通する。墨筆打ち付け外題「元次山集 幾」。
木綿素絲四針眼裝。雍正五年刊本の「上諭」の廢紙を用い襯裝。墨筆
書根「元次山」。背に朱筆をもって册次「幾」。竹紙印本。

首に「元結本傳」(『新唐書』)六葉、次に「唐元次山文集目錄」
一二葉、その後本文。雙邊(一九・四×一三・四糎)、有界九行
二〇字、注小字雙行。版心、白口、無魚尾(卷一首葉。他の葉には單
黑魚尾・單白魚尾もあり)、「元次山集 幾(卷次) 幾(葉次)」。第
一行「唐元次山文集卷之一」、第二行(低十一格)元 結次山著、第
三行以下も同じく低十一格にて「陳繼儒眉公鑒定／(吳震元長卿／王
時敏遜之)全訂、第六行以下に本文。斷句點、批點を刻入する。本版

は、『善本書室藏書志』卷二十四著録の『唐元次山文集』十二卷本と
同版と思われる。孫望校『元次山集』(中華書局、一九六〇年三月)は、
「凡例」に「南京圖書館藏明刻陳繼儒眉公鑒定本元次山集譌謬至多。
不足根據」というのが、すなわち『善本書室藏書志』著録本である。

「元結本傳」末葉裏に古城坦堂(貞吉)の手識があつていふ。
日本文政四年の官板あり、／是集は後人の綴拾せしものにて舊本
に在らず、其の記する所／

は天都の黃又黃晟全訂本なり。(墨筆)

筐中集一卷、唐の元結撰す此の書は乾元三年の作にて沈千雲／王
季友、于濶、孟雲卿、張彪、趙徵明、元李川七人の詩廿四首を録
せり。(朱筆)

この外、各册末葉に「丁巳(大正六年、一九一七)盛夏」における
讀後の識語を朱筆で加えており、第四册末には「七月三十日點讀於目
白山齋／是日爲 明治天皇五周年祭」とある。

「本傳」首葉に「凝川朴流馨杞堂／收藏金石詩文書畫」朱文長方印、
「古城文庫」朱文長方印。「目錄」の首葉に「南印／秉哲」白文雙邊方
印、「荒浪／臧書」朱文方印、富士山と川流の景に「尋水／望山」朱
文方印、「朴杞堂／鑒定」朱文方印。卷一首葉に「杞／堂」朱文方印、
「朴流／馨印」白文方印。卷四首葉「杞堂／珍藏」白文方印。卷七首
葉「臣(陽)／流馨(陰)」朱白文方印。卷十首葉「迥遙／館人」白
文方印、「樗／下生」朱文方印。南秉哲(一八一七—一八六三)は李
氏朝鮮の憲宗時代の文官。憲宗の三年(一八三七)に庭試文科及第、
吏曹判書、大提學などの官職を歴任し、詩文を善くして數學・天文學

にも秀でた。朴流馨については未詳であるが、「凝川」は密陽の別名である（魯耀翰氏の教示による）。「荒浪／臧書」「尋水／望山」の二印は同色であり、森槐南の杜詩などの講義の速記を行った荒浪煙崖のものかと思われる。さすれば本版は、日本に渡ってから、荒浪煙崖を経て、古城垣堂に歸したと推測される。

東坡先生詩集 三二卷東坡先生文集七五卷 宋蘇軾撰 舊題王十朋注
明陳仁錫評 明崇禎六年序刊 四〇冊 ホ921-15

後補香色唐紙表紙（二五・七×一六・二糎）。素絲雙線五針眼裝。

書根墨筆「東坡集」詩 紀年錄／墓誌／總目 一（冊次）（首冊）。扉
單邊「陳明卿太史評」「金閭翼／羽明梓」（朱文長方印）／蘇東坡全集／「潛確居藏版／如翻刻必治」（朱文長方大印） 本衙藏版「世／錦／堂」（朱文方印）。竹紙印本。

第一冊の首に陳仁錫の序文一四葉があり、末に「崇禎癸酉（六年、一六三三）立夏日／史官陳仁錫書於澹退堂」と記す。次に宋の趙夔の「又序」九葉と王十朋「詩集序」、傅藻「東坡先生紀年錄」三九葉、蘇轍「東坡墓誌銘」一五葉、王十朋編「註詩姓氏」五葉、「東坡先生詩集總目」四葉が續く。第二冊の首に卷一の目録を配し（以下、各卷首に卷目あり）、その後本文。單邊（二〇・八×一四・二糎）、有界一〇行、二〇字、注小字雙行。版心、白口、單黑魚尾、「東坡詩集魚尾 卷幾 紀行（分類名） 幾（葉數）」行間に批點、上層に評語を刻す。第一二冊までが詩集、第一三冊から文集となり、詩集と同じく扉を加える。本文に先立ち、首に紹興三十二年の「勅」四葉、以下

「宋史蘇文忠公傳」、宋王宗稷編「東坡先生年譜」四〇葉、「東坡先生文集總目」九葉を收載する。卷六十四の冒頭十五葉の本文を缺き、墨界十行の無文の野紙を補入する。

各冊の首葉に「李印／載先」白文方印（「載先」の二字は擦り消され不鮮明）、「雲／石」朱文方印（原印記を剝去して白紙補入して鈐す）、「讀杜／艸堂」朱文方印（寺田望南）、「古城文庫」朱文長方印がある。李載先（？——一九八一）は、李氏朝鮮末期の武臣・政治家。興宣大院君の庶長子で高宗の異母兄に當り、武科に及第して軍職に重きをなしたが、政争のため濟州島に流刑、ついで死を賜った。

蘇東坡詩集 二五卷 宋蘇軾撰 劉辰翁評 「明末」刊 六冊 ホ921-6

後補香色表紙（二六・六×一六・六糎）。書根墨筆「幾 坡詩」。竹紙印本。

劉須溪評點九種書の一つ。首に宋の王十朋「蘇東坡詩註序」二葉、趙夔「蘇東坡詩註序」五葉、「蘇東坡詩集目錄」五一葉を附し、次に本文。單邊（二〇・四×一三・四糎）、有界九行、二〇字。版心白口、單白魚尾、上象鼻に「蘇東坡集」、魚尾下に「卷幾 幾（葉次）」。稍や細長の字様から明末の刊本と推測される。

序目の首葉に「澹寒齋（？）／書画記」朱文長方印、「古城文庫」朱文長方印、「坦堂外／史珍臧」朱文長方印があり、また本文首葉に「金印／相説」白文方印、「肖／又」朱文方印、首冊末に「朽／土」白文方印。

崆峒集 六六卷目三卷 明李夢陽撰 曹駒・曹大章校〔明〕刊〔補刻、曹大章〕 一二冊 ホ921-25

後補香色表紙(二四・七×一六・一糎)。素絲雙線五針眼裝。書根、墨書「幾 空同」。白紙刷り本。

首冊「空同集目錄」上中下三卷すべて五〇葉(卷下缺第四九葉)。第二冊、竹紙護葉に次いで本文。首に黃省曾「空同先生文集序」三葉を附し、末に「嘉靖九年春三月十六日」とある。單邊(一七・六×一三・〇糎)、有界一〇行、二〇字。版心白口、單白魚尾、魚尾下「空同集卷之幾 幾(葉次)」。本文首葉首行「崆峒集卷第一」、次行低一格「詩」、空二格「四言十首」。

卷一 第一九葉補寫(料紙は竹紙)。卷一三第四葉・卷一九首葉が漫滅。卷八・一三・一四・一六・一九・二二の末葉尾題「空同先生集」。卷二 二書題卷次下、空二格「江陰曹駒校正」。卷二三首葉第二行、低一格「北郡李夢陽撰」。卷二七首葉、首行「空同先生集第二十七」、第二・三行低一格「北郡李夢陽撰／吳郡曹大章補刻校正」。卷二三から卷三一は、方體の字様に變わっており、補刻部分と思われる。

每冊首葉に「肖／又」朱文方印、末葉に「朽／土」白文方印。

唐柳先生集 四五卷外集・龍城錄各二卷集傳一卷 唐柳宗元撰 宋童宗說等注 明刊(覆明萬曆二十九年序刊本) 一〇冊 ホ921-11
後補香色表紙(二六・〇×一六・四糎)。素絲雙線五針眼裝。書根墨書「幾 柳子」。竹紙印本。

首に唐の劉禹錫「唐柳先生文集序」二葉があり、末に「萬曆二十九年歲次辛丑錢唐莫睿書」と記す。次に「唐柳先生集編注諸賢姓氏」一葉、「唐柳先生集目錄」三六葉を附して後に本文。單邊(二一・二×一三・八糎)、有界一〇行、二〇字、注小字雙行。版心白口、上象鼻「柳文」單黑魚尾下「幾卷 幾(葉次)」。ままた朱筆で不鮮明字・墨丁を描補、また校正、語注を加える。

「大／瞻」「朴鍾／岳印」「高／靈」各白文方印、「坦堂外／史珎臧」「古城文庫」各朱文長方印が每冊首にあり、また卷一首には「五／山」朱文、「丁／子□」白文、「坦／堂」朱文、「貞／吉」白文の各小方印を見る。

以上の五本は細川家永青文庫寄託坦堂文庫本。坦堂は古城貞吉(慶應二年一八六六―昭和二十四年一九四九)の號。熊本の人。『支那文學史』を明治三十年(一八九七)に經濟雜誌社から出版して後、清國に遊學し、明治三十四年に歸國する。遊學中、義和團の亂に遭い、狩野直喜・服部宇之吉らとともに北京籠城を経験した。同三十九年から東洋大學教授、その後、大東文化學院などで教授する。『支那文學史』は、日本における中國文學史の最初の專著であり、手稿本が永青文庫に所藏される。

山堂肆考 存角集卷三四―三八・徵集卷一七―二〇・二五―二九〔明〕彭大翼撰 張幼學編〔明〕刊(後修) 三冊 032-1ト25
第一冊は支子色卍字繫紋空押し表紙(二三・六×一五・二糎)、第

二冊は三菱龜甲繫ぎ紋空押し、第三冊は雷文繫ぎ空押し表紙。墨筆打ち付け外題「山堂肆考 第二十八／角（小字雙行）」（第一冊）、右方に部目・門目を列記。右下「共五十」。書根墨書「山堂肆考 文學字學 諡法 角」（第一冊）。藍色絲單線五針眼裝。竹紙印本。

單邊（二〇・二×一二・四糎）、有界一行、二二字。版心白口、上象鼻「山堂肆考」、單黒魚尾下「某集幾卷 幾（葉次）」、下方に字數（未記入の葉もあり）。上層に音注、本文に斷句圈點、墨點を加える。第一冊の首行は「山堂肆考文學第三十四」とある。角集卷三五第二一葉、徵集卷二八第二五―二八葉・卷二九第一一六・九・一〇葉は補刻葉であり、版心に「石渠／閣補」とある。

朝鮮學人の藏書印はないが、典型的な朝鮮改裝本であり、表紙には朝鮮整版の『通鑑綱目』の反古殘葉が用いられている。

⑥佐藤道生氏所藏本

唐文粹 宋姚鉉編 明徐仁中等校 「明崇禎三年」刊 殘本一五冊
淡黄色雷紋地丸圍花紋空押し表紙（二六・一×一六・六糎）。墨筆打ち付け外題「唐文粹 幾」。書根墨書「幾 唐粹 頌（文體名）」。竹紙印本。

雙邊（一九・九×一三・五糎）。有界九行、二〇字。版心白口、單白魚尾、上象鼻「唐文粹」、魚尾下「卷幾 幾（葉次）」。批點、また上層に評語を刻入する。殘存首冊の卷二一首葉、首行「唐文粹卷二十一」、次行低四格「吳興姚鉉纂 武林徐仁中閱」。以下の卷の批閱者には汪道焜などの名を見る。

⑦立命館大學（高木文庫）

重刊千家註杜詩全集 二十卷重刊杜工部文集二卷序目（重刊杜工部年譜等）一冊 唐杜甫撰 「元高楚芳」編 明萬曆九年序刊 一二冊
藍色洒銀表紙（二五・五×一七・〇糎）。白紙裏打ち補修、素絲四針眼裝。表紙や護葉の宣紙、裝訂の様態から清末・民國初期の改裝と思われる。竹紙印本。「慶州／李氏／英雨」朱文方印。

雙邊（一九・三×一三・三糎）、有界一行、行二二字、注小字雙行。朱墨兩筆の批點及び墨筆の批注・校語が見られる。高木正一先生舊藏本。

唐柳河東集四五卷唐柳河東外集五卷唐柳河東集遺文・唐柳河東集附錄各一卷序目一冊 唐柳宗元撰 明蔣之翹注 「明末」刊 一四冊
淺黄色網目圍小小花等紋空押し表紙（二七・〇×一七・三糎）。墨筆打付外題「河東集 幾之幾（首冊「目錄」）。右上に分體名を記し、右隅「共十四」とある。墨筆書根「幾之幾（首冊「目錄」）河東集」。紺色絲單線五針眼裝の朝鮮改裝本。竹紙印本。

首冊、竹紙護葉一葉の後、劉禹錫「唐柳河東集序」、「讀柳集敘說」、「唐柳河東集目錄」。第二冊から本文、首行「唐柳河東集卷第一」、次行「（低八格）」。雙邊（一九・〇×一三・〇糎）、有界九行、一七字、注小字雙行。版心白口、無魚尾、上方に「柳河東集 卷弟幾」、下方に「三徑藏書」。

ままた朱墨兩筆の批點を加える。書き入れはない。第一三冊書根に水浸み跡あり。印記は第一冊首葉に「昇如／讀本」朱文方印、「算／箸」

朱文方印。第二册以降の各首葉には二方印の剝去の跡がある（第一三册の一印は右方が剝去され、左方に「存長」の二字を見る）。時代を経た厚手の桐材の書函に收められ、保存の良い一本であり、印面も精良である。高木正一先生舊藏本。なお鶴飼石齋訓點の和刻本は、この蔣之翹注本を底本とする。

⑧ 韓國學中央研究院藏書閣

分類補註李太白詩二六卷附唐翰林李太白年譜 宋楊齊賢注 元蕭士贇補明〔曹道〕（玉几山人）校（附）宋薛仲邕 明嘉靖二十五年刊（萬曆十九年修） 一八册 集部別集類4-111

楮染色（剥落激しい）雷文空押表紙（二七・〇×一七・〇糎）、灰青綠色題簽墨書「謫仙集 甲幾」、下方に墨書「子」、右下方墨書「共十二」。褐色絲雙線五針眼裝（以上、首册による）。竹紙印本。表紙裏に藍筆四行「詩中句読者、固自有之矣。今余便筆為句読。古詩皆／点分句読、句則点〇、讀則点ゞ。但律絶不分句読、共／点〇以便覽。／注文句読固有之。其多短句（？）者、不知何人点之」のほか、墨・朱・藍筆の批點の凡例などを記す。次に白紙三葉を補入し、首葉表に朱筆の附箋（塗改甚だしい）、第二葉表に朱筆一行「當塗令李陽水」、墨筆の附箋「賈客樂五絶／戲贈杜甫七絶云々」五行、裏葉および第三葉表に朱・藍筆をもって『唐詩合解』所收詩の篇目などを記す。續いて、補寫（白紙墨欄、無界八行一八字）によって李陽水「唐翰林李太白詩序」、樂史「後序」、劉全白「唐翰林李君碣記」、さらに「後序」と題して宋敏求「題」・曾鞏「序」・毛漸「題」の三篇を加える。その

後に陸基恕「重刻唐翰林李太白詩集序」四葉を附す。款式は四周雙邊、有界七行一六字。この重刻序の末には「萬曆辛卯（十九年、一五九一）孟陬月旦橋李陸基恕撰」とある。次いで蕭士贇「序例」一葉、末尾に附箋が挿入されて「邦本有之」と記し、「氷崖後人」「粹齋」「天樂吟院」三刻印を模寫する。「邦本」とは、この三刻印を「序例」末にもつ和刻本の『分類補註李太白詩』を指す。和刻本『分類補註李太白詩』は、明萬曆許自昌校刻本を底本に用いて山脇重顯が訓點を加え、延寶七年（一六七九）に出版されたものである。續いて薛仲邕「唐翰林李太白年譜」八葉、白紙一葉を補入して分類名を墨書、次いで「分類補註李太白詩目錄三七葉。以上を前付けとし、以下、本文。四周雙邊（二・三×一四・二糎）、有界八行一七字、注小字雙行。版心白口、内向白雙魚尾」「李集卷幾 幾（丁付）」下方に「信」「周三」などの刻工名を刻入することがある。首行「分類補註李太白詩卷之一」、次行低一格「古賦八首」、空二格「春陵楊齊賢子見集註」。第三行低七格「章貢蕭士贇粹可補註」、第四行低五格「大明嘉靖丙午玉几山人校刻」とあって、次行に篇題・本文と續く。

本版は元版系『分類補註李太白詩』を刪節した明嘉靖丙午（二十五年一五四六）の曹道（玉几山人）校刻本であり、『集千家註杜工部詩集』と合刻された李白集の注釋本である。ただし重刻の序を附すように、萬曆十九年の後修本と思われる（補刻葉の調査に至らなかつたため、暫定的に後修本と見做す）。李陽水「唐翰林李太白詩序」以下の諸家序文等の補寫だけでなく、本文にも卷七第九・一〇・一四葉、卷九の第九葉、卷一四第五・六葉、卷十九首三葉（許自昌本による）が補寫

されている。また本書の冒頭に批點の凡例が記されているように、本文には多くの批點、また校注が朱藍兩筆で加えられている。印記は李陽水序首葉の下方に「芙蓉／樓」朱文方印（この下の白文方印は未詳）、上方に「李王家／圖書之／章」朱文大方印がある。

第一冊裏表紙内面に藍筆「△邦本朝鮮本共校看成／毎卷如此」とあり、「……看成」の下に「癸□九月□□（□は判讀困難の文字）」と記す。卷二五末に白紙一葉を加え、「嘉善大夫全羅道觀察使兼兵馬水軍節度使尹斗壽」以下すべて七名の列銜を記し、末行に「萬曆十六年五月（空一格）日羅州都會開刊」とある。この萬曆十六年（一五八八）すなわち朝鮮宣祖二十一年の刊記をもつ全羅道羅州都會の刊本は、藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』（京都大學學術出版會、二〇〇六年、頁一〇三三）に解説されている。第一冊末の識語にいう「朝鮮本」は、宣祖二十一年羅州の刊本であったと見なしてよからう。したがって「朝鮮本」と併記された「邦本」も、蕭士贇「序例」末の刻印三種を模寫した附箋にいう「邦本」と同じ和刻本である。上記の諸家序文等、本文の補寫および朱藍筆の校注・批點、また第二冊裏表紙背面に「天明甲辰（四年、一七八四）云々」、「寛政五年（一七九三）云々」の二條の藍筆識語が加えられており、これらすべては江戸後期の同一學者によるものである。朝鮮渡りの明版に和刻本と朝鮮整版本とを用いて日本の學者が校補を書き加え、それが再び海を渡り、韓國に現藏されていることは、書籍交流の上の興味深い事象であるといえよう。

⑨家藏

詩歸序首 古詩歸一五卷唐詩歸三六卷 明鍾惺・譚元春編〔明末〕刊

一〇冊

白椽色空押表紙（二五・二×一六・八糎）、墨書外題「詩歸甲（至癸）」、右上に「古逸詩／漢」（甲冊）、「初唐」（丁冊）など分期名。墨筆書根「甲（冊次十干）詩歸 分期名」。五針眼、紺絲單線綴じ。

首に明萬曆四十五年（一六一七）八月朔日の鍾惺の「詩歸序」、譚元春の「詩歸序」を載せる。目錄は每卷首に配す。本文、雙邊（二〇・〇×一三・二糎）、無界九行一七字、注小字雙行。版心白口、單黑魚尾、上象鼻に「古詩歸（唐詩歸）幾卷」、魚尾下に分期名・詩人名、下方に丁付。

竟陵派の鍾惺・譚元春が編集した『詩歸』の傳本は比較的多いが、本版は、乾隆三十二年（英祖四十三年、丁亥、一七六七）に朝鮮燕行使となり『丁亥燕槎錄』（東洋文庫所藏）を遺した李心源（一七二二—？。延安の人）が北京で購入して歸國し、弟の性源（一七二五—一七九〇）字善之に贈呈したものである。『丁亥燕槎錄』二月一日條に多種の書籍購入の記録があり、その中に「古唐詩歸一兩五錢」と記されているのが正にこの本である。譚元春序末の「丁亥冬使燕携贈季氏善之」、「古詩歸」卷一首葉の「丁亥冬使燕携贈家弟／善之」という兩墨識は短い文言ではあるが、東アジアの漢籍交流を今に傳えている。また鍾惺序首と各卷首に性源の「善／之」朱文方印、「李／性源」白文方印、「延／安」白文方印が鈴せられている。なお李心源・性源兄弟や『丁亥燕槎錄』に關しては魯耀翰氏の教示を得た。

【附記】

小論は、二〇二〇年十一月十四日に行われた韓國ソウルでの成均館大學校大東文化研究院國際會議「東亞文獻學的革新視角―資料還流和書目收藏」における發表原稿「朝鮮渡り唐本の研究について」に基づき、その後の調査成果を加え、修補したものである。なお成均館大學校での發表原稿は、高麗大學校研究教授の魯耀翰氏の韓國語譯により『大東文化研究』第一一三輯（成均館大學校大東文化研究院、二〇二一年三月）に掲載された。

本研究は、JSPS科研費19K00381の助成を受けた研究成果の一部である。

（立命館大學文學部特任教授）

